

アーティスト・トーク 内藤礼 うつしあう創造

本展覧会は、新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、当初の予定である5月2日より2ヶ月遅れて6月27日に開幕しました。もともと会期半ばの6月28日に予定していた内藤礼さんのアーティスト・トークも一旦は中止となりましたが、開幕後様子を見つつ、感染対策を徹底して、8月2日に実施することができました。金沢21世紀美術館という場所で、どのようにプランを練り上げていったのか、過去とのつながりも交えつつ、率直に語ってくださっています。島山直哉さん撮影の展示風景写真とともに、トークの内容をお届けします。

日時 2020年8月2日[日] 14:00-15:30
 会場 金沢21世紀美術館 シアター 21
 登壇 内藤礼
 島敦彦(金沢21世紀美術館 館長)
 横山由季子(本展担当キュレーター)

展覧会会期：2020年6月27日[土]—8月23日[日]
 主催：金沢21世紀美術館

人が集う美術館

横山 この度の展覧会はもともと5月2日開幕の予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を受け、4月7日に緊急事態宣言が出されたため、2ヶ月ほど延期になり、6月27日にオープンしました。すでに会期の半分が過ぎたところで、本日のトークを実施しています。まず金沢21世紀美術館で内藤礼さんの個展を開催するに至った経緯について、島館長からお話いただけますか。

島 内藤さんは、金沢21世紀美術館を設計したSANAAのお一人である西沢立衛さんと豊島美術館を作られており、当館の空間にどういう応答をされるのか、という期待がありました。最初に金沢に来ていただいた頃は、水戸美術館の現代美術ギャラリーでの個展（「明るい地上には あなたの姿が見える」2018年）を準備されていた時でしたね。内藤さんが金沢にいらっしゃって空間をご覧になった時の印象についてお伺いできますか。



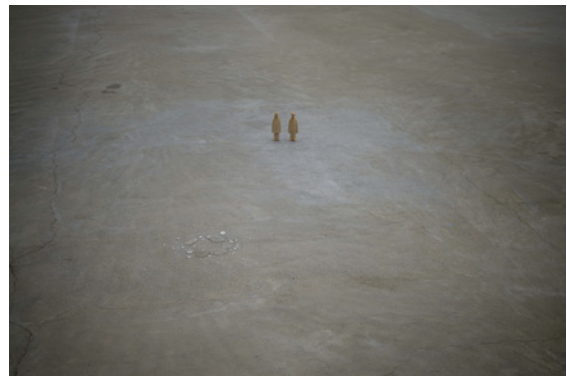
《精霊》2020年 リボン、スチールに塗装 光庭2

内藤 3年前、最初に金沢に来た時は、人がこれほど集う場所なのかと驚きました。展示室を進みながら、作品と向き合い、内省を深めていくのが一般的な美術館だとすると、金沢21世紀美術館は町の中を歩くような感じで、部屋に入って、通路に出て、ということを繰り返す場所です。人の動きや気配、響く声であふれていて、その中に作品がある。正直に言えば、人が多いことに抵抗感も感じました。一方で、もともと私は目の前にあるものは良いものである、と考えるようにしています。雨を受け入れようと思った豊島美術館のように、ときに美術作品を見る環境としては考えられないくらい、大勢の人がいることが良かったと思えることは、どういうところだろう、という問いからスタートしました。

横山 展示が始まってから、新型コロナウイルスの影響で普段に比べると落ち着いていますが、必ずしも美術作品を見ようという目的ではなく、観光で立ち寄るお客さまも多いです。でも開幕してからの様子を見てみると、観光でいらした若いカップルや、大学生のグループも、じっくり作品を探したり、光庭のリボンを椅子に座って眺めたり、小さな《ひと》と向き合ったりしています。内藤さんの作品が人を穏やかな気持ちにさせるんだなということ、この1ヶ月間で実感しました。

作品としての展覧会

島 これまで内藤さんは、富山の発電所美術館、鎌倉の神奈川県立近代美術館、東京都庭園美術館、水戸芸術館と様々な場所で個展をされましたね。今回の金沢の展示が、色々な場所で試みられてきたことの一つの集大成にもなったのかなと思うんですけども、内藤さんご自身としては、どのように今回の展覧会を受け止めておられますか。

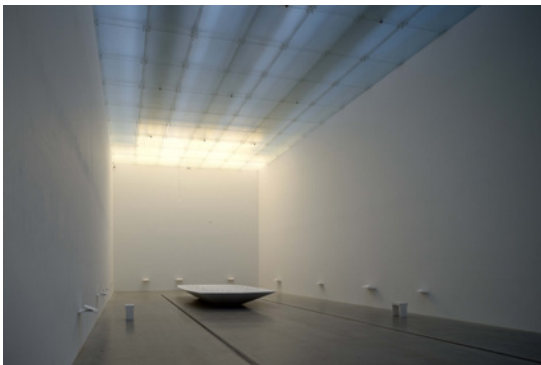


《母型》2020年 水、ミクストメディア / 《ひと》2020年 木にアクリル絵具 展示室7

内藤 どの機会も集大成という意識はないんですが、いくつかの展示室で構成をする形が生まれたのは鎌倉の時で、展覧会全体を作品というふうに捉えることができます。それ以前の80年代～90年代は、一つの展覧会に一つの作品があって、そこに人が一人で入っていくという形の作品でした。全体が一つの作品という構成になったのは、鎌倉、東京、水戸、金沢と4度目で、この構成だから生まれる表現が自分の内部で深まってきている感じはあります。

私の場合は、ある時期に作った作品が、その時期だけで終わるということはほとんどなくて、時代や社会が

流れていく中で、どこかで見つけ、捉えた小さな芽がある瞬間に花開くわけですけど、それを育てていきながら、ずっと持っている「地上に存在していることはそれ自体が祝福であるのか」というテーマと、その時の私というものが結び付いています。ある時生まれた作品が、また次の場所で少し姿を変えたり、新しい意味を含んで別の場所で存在している、ということが起きているんです。だから、どこかで展示した作品を再現しているということとは違います。



展示室11 展示風景

横山 展覧会が開幕してから、本当にありがたいことにたくさん取材をしていただいています。決まって「新作はありますか」と聞かれて、私は「ある意味では全て新作です」というふうにお答えしています。もちろん、別の場所で展示された作品もありますけど、この金沢21世紀美術館という空間で、内藤さんが2年の歳月をかけて考えたプランが実現したのが今回の展覧会ですよね。

内藤 そうなんです。私は、ある場所に存在しているもの、目に入るものは、全てがそこにあるものとして捉えようとしています。例えば、人が立っている床も、この光も、この背景の色も、側に私がいることも全てが関係しあっているのだから、どの一部も無関係のものはないですし、どれだけ受け入れられるかということは、それらを肯定できるかということでもあります。

他者の存在

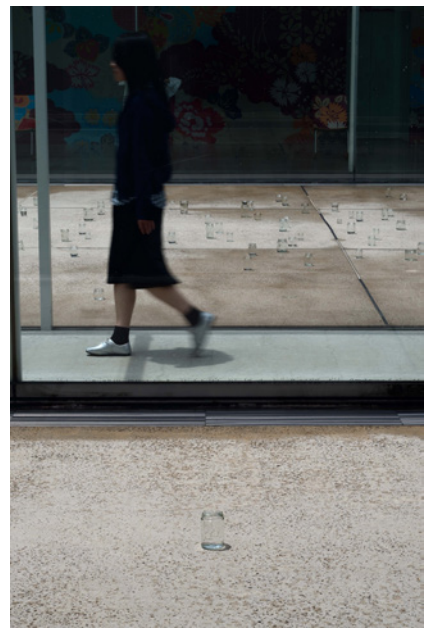
島 1991年に発表された《地上にひとつの場所を》にはじまり、その後10年くらいは、お客さんが一人ずつ入って向き合うという作品でした。そして2001年に直島の家プロジェクト「きんざ」の《このことを》という恒久設置の作品が完成して、これも一人ずつの鑑賞ですけども、内藤さんが作品を他の人に委ねるようになる、大きなきっかけになった作品だと思います。そのきっかけはどのあたりにあったのか、お尋ねできますか。

内藤 最初に自分以外の人間がいると意識したのは、1997年のフランクフルトの修道院の作品です。壁画にカルメル会修道院の歴史や、聖書に登場する人がたくさん描かれていましたが、彼らを見たときに、かつて生きた人達であり、今の私達にとっては死者なんだというふうに感じたのが、初めて私が感じた他者でした。一人ずつ入っていく作品でしたが、私が入る前に誰かがそこに入っていた、私がこの部屋を出ることで、次の人がここに座ることができるんだと、自分以外の人の存在の時間の幅を、今現在、同時に感じられるということに気づきました。かつてここで生きて、同じ人間として苦しんだり喜んだりしながら生まれて亡くなった人達がいて、今、私はたまたま生きている係で、これから生まれてくる人達がいて、その時に初めてそういうことを考えるようになりました。

「きんざ」の《このことを》も、ずっと住まわれてきた民家を作品にすることだったので、そこで生きてきた何世代かの人達のことを思ったりしながら、そういう感覚が積み重なっていったのだと思います。そして「きんざ」の翌年のライスギャラリーの個展で初めて、一人ずつだけれども、テントの布が透けて、足下の布が切れていて、中にいても外の気配を感じることができるというように、境界が薄くなっていきました。

島 やはり内藤さんの作品は、同心円状に広がってきたような感じがしますね。今回の金沢の展示をご覧になっている方々も、展示室内にたくさんの方がいても、おそらく一人一人が作品と向き合っている感じがします。

内藤 今回の展示室も一人ずつになる空間はないですが、基本は、側にいる人が自分とは別の体験をしているという



《無題》2020年 水、ガラス瓶 光庭3

ことが、むしろくっきりしているのではないのでしょうか。

今、私はたまたまこの時代に生まれて、こういう生活をして、こういう考え方をしていますけれども、人類のはじまりの頃にいた人達にとっての感覚や感情について考えることがあります。要するに人間とはそもそも何だったのかなど。火を起こしたのは、闇が恐ろしくて耐え難いから、太陽をうつしとったところがあると思います。闇イコール死であって、それを抱えきれずに、火を起こしたとするならば、私達も今だって、夕方になったら灯りを点けますよね。今回の展示では、太陽という名前をつけた電球に、夕方になったら明かりを灯しました。自然の移ろいをそのまま受け入れたため、見ている人は、それぞれ全く異なる瞬間を見ていることになります。安定した照明の中で見るのとは違って、刻々と外界が流れていることを、たまたまそこにいた時間に見る。しかもその人の歴史や、その日の心情がみな違う。そう考えると本当に誰一人として同じものを見た人はいなくて、それは孤独だということの証明でもあります。絶対的に一つにはなれないけれども、同じ作品を共有していると思った時の、側にいる名前も知らない人に対する感情というのが、ある時期から生まれてきて、展覧会で見かける人に対する愛おしさみたいなものを感じるようになりました。



展示室10 展示風景

横山 今回の展覧会では、「うつしあう」というテーマともつながってきますが、展示室を巡りながら、訪れた人同士、あるいは作品と人との、見ることと見られる関係が入れ替わって行って、自分が何かを見ている時もあれば、場所によっては自分が他の人に見られているというところもありますよね。その見る、見られる関係性というもの、一対一の関係性の中で成立するものなのかなと思います。

内藤 美術作品が目の前にあり、その先に、人間へと感情が向かっていくという感覚が徐々に強まってきていて、そのことがはっきり出ている作品だと思います。

うつしあう創造

島 「うつしあう創造」というタイトルはどのように生まれてきたのでしょうか。

内藤 最初にこの美術館に来た時の印象から始まって、その後も5回、会場の確認や、素材を持つての具体的な実験に来ていますが、プランを立てている段階で、その場から感じられるもの、混ざり合って分けることができない全

てを受け取っていきました。同時に、自分がずっと持っている一つのテーマがある。そして、今現在の私の大きな関心。その三つが一つになっていく中で、私は何をしようとしているのかということ、言葉にしていきます。



《母型》2020年 水、ミクストメディア／《無題》2020年 木にモルタル、塗装／
《ひと》2011-2020年 木にアクリル絵具 展示室11

家ではたくさんの言葉を繰り返し紙に書いて、考えたことを言語化するという作業にもかなりの時間を費やしています。過去にも2、3年がかりの作品ですと、半年ぐらい言葉に時間をかけるぐらい、言葉だけの時間というのも随分あります。私の場合は、そこで何を感じようとしているのかということの、その先に素材があるというか。形は本当にその後になって順番に現れてくる。まず思考と感情があって、ゆっくり目に見える形になっていくという感じだと思います。

鎌倉の時に「まご」という言葉が浮かんできて、人間の根源的な行為の中に、「写す」にも通じますが、「学ぶ」ことや、「まね」をすることがあると実感するようになりました。人間は世界のままごとや、人生のままごとを、美術に限らず、映画でも小説でも繰り返し表現して、生きている間味わう。生きる上でそれほど再現が必要である、人間とは何だろうという興味が湧いてきて、「うつしあう」という言葉が自分の中に出てきました。



《無題》2020年 水、ガラス瓶 光庭3

それと並行して、もともと、人間が「作る」と簡単に言うことへの抵抗感が若い頃からありました。人間が物や世界や自然に対して触れる、関わるというのは、どういう態度であるべきなのかということを考える中で、「うつす」ということは、人間である限り、それ抜きでは生きていくことができないぐらいのことだと感じるようになりました。

そして、一方的に「うつす」のではなく、「うつしあう」という言葉にしたのは、自然と人間、作品と作家、作品と鑑賞者、さらに言えば、光と闇や、生と死のような、対立しているように見えるものは、もともと一つだったのに分かれてしまったから、うつしあって一つになろうとする動きが生まれているのではないかと感じたからです。二つに分かれたから、そこに空間ができて、うつしあうこともできるし、生気が生まれて、いきいきした何かが現れ始める。愛情や慈悲も湧き上がってくる。そうして間に生まれる動きのことを、創造と言うのではないかとも思うようになりました。

最初の質問に戻れば、プランを立てる中で言葉が立ち上がってきて、確信の強いものになって、「創造」という直接的な言葉を使うことが必要な時が来たんだと思い、「うつしあう創造」というタイトルにしたんです。一回決めたら、不安は一切起きないので、迷いはなかったです。

島 20代半ばから発表活動をされていますけど、どのタイトルもぶれていないですよ。同心円状に内藤さんの世界がずつつながっている感じがします。

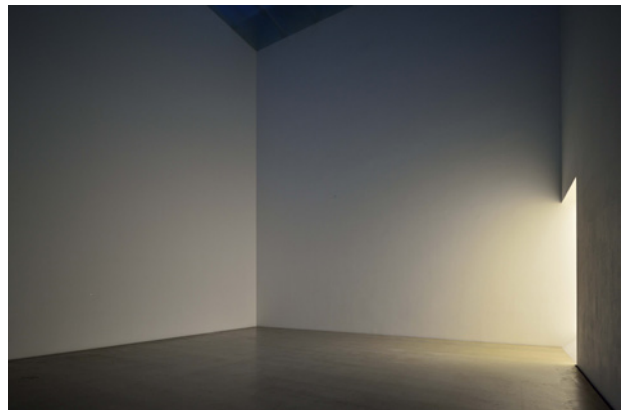
内藤 私が全てを分かっている、これが全てだと言っているわけではなくて、私はこう思っているということが真実であるから平気であったということだと思います。

言葉を超えるもの

島 『空を見てよかった』という本の中に、今回の展覧会を準備する2018年から2019年にかけて書かれた、制作にまつわる言葉がたくさん含まれていますね。

内藤 書き始めたのが2018年の水戸芸術館での個展の作品が完成した直後で、ちょうど金沢のプランを具体的に練り始めた頃です。水戸も準備期間は2年くらいでした。ある期間考えて、プランを立てて、形にして、そして展示になるのですが、私の場合は、場所との関係が強いために、現場で制作のピークを迎えます。だから、展示を経て、2年間考えてきたことが初めて現れるというか、プランを超えることがもちろん起きるわけですよ、現実というのは。それも含めて、自分が作ったから分かりきっているということは、全然ありません。目の前に起きていることは何だろうという激しい動揺、この動揺というのは強い幸福でもありますけど、何が起きているのかわからないという、この瞬間の体験が私はしたかったんだ、それが今、目の前にあるということは、言葉や感情で整理ができないくらい状態です。言葉にならないって感情が不安定にもなりますよね。それは苦しく恐ろしいことでもありますけど、人間の限界を知ろうとしているのかもしれない。

そういう時期に自分が何をしようとして、何をしたかは言うことができるけれども、これが何だとは私は言えないという文章から、書き下ろしは始まっていると思いますが、水戸の制作が終わった時に、本当にその心境でした。そういう時期から書き始めて、初めて「制作」、「作品」という言葉を使うようになりました。その文章を書いている時期に、金沢のプランもスタートし、一体化するような形で書き下ろしの後半の詩のようなものになっています。



展示室8 展示風景

横山 内藤さんから展覧会タイトルを「うつしあう創造」にしようと考えていると最初に伺ったのが、確か3回目の下見と実験を終えた1か月後ぐらいで、2019年の9月でしたよね。その時に私は初めて、内藤さんのお宅に一人で邪魔して、驚いたのが、机の上に紙の束が数百枚重ねられていて、よく見るとそこに内藤さんの小さな文字で、色々な言葉がびっしり書かれていました。内藤さんは素材や自然と対話しながら制作される方だということは分かっていたつもりでしたが、これほど言語化するところから出発しているということに、衝撃を受けました。

内藤 言葉は人間だけのものだけど、美術作品として最終的に形にする時は、さっきお話したように、自分を越えたものが目の前にあって…

横山 一度言葉にしたものに形を与えよう、という感覚とはまた違うのですよね。

内藤 言葉がむしろ、思考や感情を広げてくれる感じがします。きっかけのようなもの。言葉って言霊というか、その時期の自分にとって決定的な言葉、その短い言葉が自分の生を支えることが体験的にあるような気がします。そういうものに支えられながら、人間が利用も活用もできないような感覚的、抽象的なものでも、何かがあるところで起きているということは感じ取っているわけだから。最終的にはそういうところに辿り着こうとしているのだと思います。だから、物を見ているけれど、物を見ていないところもある。でもじっくり見ないと物の先は見えてこないんですけどね。

だから皆さん、絵の前を素通りされる方もいらっしゃるかもしれないけど、本当にこらえて、1回見てみてもらいたい。ある時間を過ぎた時に、自分にだけ現れてくるものが見えるから。

「色彩=生」の発見

横山 今回、日中は自然光のみの展示になっていますが、光庭から入ってくる光に加えて、金沢21世紀美術館の天井は、ガラスの上にあるルーバーを開けることができます。絵画作品《color beginning》のある展示室11も、しばらく佇んでいると、晴れた日には太陽が雲に隠れる瞬間や、またその雲から太陽が出てきた時の光の感覚というのが、分かるんですよね。それに応じて、絵画の見え方も、ふっと色彩が浮かび上がる瞬間があったかと思えば、また消えたりもします。

島 絵画作品は斜めに、天井からの光を受け止めるような形で展示されているんですが、展示作業中に内藤さんが、「島さん、実は」と斜めに置いてある絵を、わざわざ壁に掛けた状態で見せてくれたんです。そうすると全く違う作品に見えました。

内藤 先ほど、制作している時の自分の心が揺さぶられるという話をしましたが、絵画作品もそうで、一見穏やかで静かな

絵にも関わらずなぜ動揺するかというと、見る度に違うってことなんですね。部屋で制作している時も、自然光の入る窓が背後にあって、正面にイーゼルを立ててという環境ですが、陰ったり、日が射してきたり、天候が変わっていく自然の変化と絵画が一体化しているぐらいの状態の中で絵を描いています。

普通は、絵を観る時の基準の光があると考えますが、基準はないんですよ。だから、私が仮に決めるしかなくて、でもこれは仮のことだと、つくづく思われる絵なんです。それも人間の限界と言えるかもしれない。絵は増えも減りもしません。でも少しのことで、全く違うものを見たと思うわけです。違うものを見たということは、違う感情になったりするし、何か描かれていると思う人もいれば、何もなかったと思う人もいるぐらいの幅がある。



《color beginning》2019年 キャンバスにアクリル絵具 展示室11



展示室10 展示風景

絵画だけではなく、すべての展示がそのようになっていて、自然光や、そこに来る人もやっぱり、偶然性によるものです。側にどういう人が立っていたか、そこに何人の人がいて、その人たちの立ち居振る舞いも含めて、その時に偶然に起こる自然の出来事が、絵と光を切り離すことができないぐらい、切り離せない展示空間と構成になっています。その全体を自分が受け入れられるようにと願いながら構成をしていったけれど、本当は苦しい。普通、人間はいいところ

だけを見せたいと思うんじゃないでしょうか。でも、私は作品が一番伝わる方法を選ぶことは諦める。その代わりに、本当のことがその場で起きているようにしたいと思いました。作家の選択としては、正しいのか正しくないのかわからないけど、これはしなくてはいけないというふうに、自分で思っています。

横山 今回の展示で、唯一天井のルーバーが開かないのが、横長の窓の作品がある展示室9と10で、日中も薄暗いんです。そんな展示室の中のベンチに座って、窓のガラスを見ると、自分も含めて室内はモノトーンですが、入口から見える通路が反射して窓に映っていて、通路から入ってくる人は色彩をまとって現れます。絵画作品も、見ていると色彩が現れてきますが、その色彩の先に、内藤さんは生というものをしているのかなと思います。展示室全体で色彩が、生と結びついていますよね。

内藤 今回、構成して、実験しながら気がついていったことですが、展示室9、10で窓の作品を置くことは考えていましたが、最初は反対の位置を想定していました。様々な理由が重なって、窓の位置を最終的な状態にした時に、この美術館は通路が自然光であふれていて、室内に入ると明るさが減って、中の人はモノトーンに映り、そこに入ってくる人はカラーだということに気づきました。生の外側から生きている人を眼差すということを、窓ガラスを通して考えて



展示室9 展示風景

いた時に、たまたまこの環境で、明暗のコントラストによりそれが実現した。その時に、生きている人と色彩と光と、その三つが一つになって現れてくると感じ、自分にとってはものすごく大きな発見でした。そういう発見が一番喜びが大きいです。

それと展示室12のガラスを多角形にカットしたビジュウのようなもの、あれも入口から入ってくる人が、キュビズムのように複雑な姿で、色彩とともに現れてくるのを、ガラスのこちら側にいる人が見るという作品です。こうした作品を通して、絵画作品で試みていたことは、これと同じことだったんだと、振り返って、より絵のことも分かったという感じでした。絵の時には、人間に向かって働きかけてくるものとしての生気でしたが、ガラスの作品では、人間と色彩の喜びの発見があったように思います。

横山 最後の展示室14のスプレーズの作品《母型》もそうでしょうか。

内藤 スフレビーズ自体はまたモノトーンですけど、スフレビーズの奥にある開口部の先に、色彩にあふれたプールとエントランスロビーが見えます。この開口部は本来は出入口なのですが、作品として斜めの造作物を作り、小さな窓のようにしました。水戸の時はマトリックスを通して生まれるというところから展覧会がスタートしていましたが、今回は最後の部屋がマトリックスで、スフレビーズごしに、プールの作品を鑑賞されている方々や、見られていることに気づいてないエントランスロビーの人の姿や、さらに、外壁がガラス張りであるために、道路の向こう側を歩いている人や自転車や車も全部、開口部から見えるんですね。

この展覧会は、最初の部屋から始まって、作品を通して人間や小さな《ひと》を見たり、逆に見られたりする、生のレッスンという感じもしています。見る・見られるというのを繰り返していくのですが、生きている人を見ていると、生の外側に意識が出ているとを感じる時があります。意識の中で、生の内側と外側

を行き来しながら、最後に14の部屋に行き着いた時に、展覧会場の外、作品の世界の外側にある日常の風景、そこにいる人達を見ることとなります。その時に、あなたは生きている人だ、あなたは生であると思えたら、私も生であると思えると思うんですよ。うつしあっているわけです。



《地上はどんどこだったか》2020年 ガラス、糸 展示室12



《ひと》2016-2017年 木にアクリル絵具 展示室11

あなたは生であると思える時は、どういう時なのかなと自分に対して聞いてみると、私が思うのは、あなたは限られた命の死にゆく人間であると思った時に、あなたは生であるということが最も感じられる。それが慈悲だと思う。愛おしさや慈悲が生まれるのは、そういう感情の時ではないかなと私自身、自分の体験としてそう思っています。名前も知らない誰かの、顔もはっきり分からない、見られていることにも気づいてないその人達に、あなたが生であるという愛おしさや慈悲のようなものがもし生まれたら、私はそちらの世界がカラーに見えるんです。そして、その窓の向こうに見える色彩の世界に私は誕生することができる。亡くなる人はもう二度とそっちには戻れないけれども、生きている間は何度でもこの世界に戻ることができるんだと思いながら、私自身は窓の外の風景を見えています。いつも強く思えるわけじゃないけど、そう思える瞬間が確かにありました。

「うつしあう創造」というタイトルについてずっと考えながら、その先にあるのはやっぱり、自分が目にした人たちの存在です。会場の中に一緒にいる人もそうだし、ガラスに反射して見える人もそうだし、最後に、展示室14の窓の向こうにいる人もそうなんですが、その人達にどういう感情が生まれるのか、愛おしさや慈悲が生まれるのかということが、私が作品を通して自分に問いかけたことでした。

横山 その問いかけの結果として、冒頭でお話のあった、金沢21世紀美術館という場所が普通の美術館ではあり得ないぐらい人であふれているということに対して、内藤さんは非常に美しい作品で応えてくださったなと思っております。



《母型》2020年 スフレピース、鈴、テグス 展示室14

写真：畠山直哉 編集：横山由季子（金沢21世紀美術館） デザイン：北口加奈子

内藤 礼

NAITO Rei

美術家。1961年広島県生まれ、東京在住。1985年、武蔵野美術大学造形学部視覚伝達デザイン学科卒業。1991年、佐賀町エキジビット・スペースで発表した「地上にひとつの場所を」で注目を集め、1997年には第47回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際美術展の日本館にて同作品を展示。主な個展に「みごとに晴れて訪れるを待て」（国立国際美術館、大阪、1995年）、「Being Called」（フランクフルト近代美術館企画、カルメル会修道院、フランクフルト、1997年）、「すべて動物は、世界の内にちょうど水の中に水があるように存在している」（神奈川県立近代美術館 鎌倉、2009年）、「信の感情」（東京都庭園美術館、2014年）、「émotions de croire（信の感情）」（パリ日本文化会館、2017年）、「Two Lives」（テルアビブ美術館、2017年）、「明るい地上には あなたの姿が見える」（水戸芸術館現代美術ギャラリー、2018年）。パーマメント作品に《このことを》家プロジェクト「きんざ」（ベネッセアートサイト直島、2001年）、《母型》（豊島美術館、2010年）。

島 敦彦

SHIMA Atsuhiko

1956年富山県生まれ。1980年早稲田大学理工学部金属工学科卒業。1980年4月より建設準備室を経て富山県立近代美術館に勤務した後、1992年より国立国際美術館（大阪）に移り、主任研究員、学芸課長を経て、2013年より同館副館長兼学芸課長となる。2015年より愛知県美術館館長を務めた後、2017年4月より現職。

横山由季子

YOKOYAMA Yukiko

1984年香川県生まれ。2015年東京大学大学院博士課程（表象文化論）満期退学。2009年より世田谷美術館学芸員、2011年よりパリ西大学ナンテール・ラ・デファンス校（美術史）留学、2013年より国立新美術館アソシエイトフェローを経て現職。主な担当展に「大岩オスカール 光をめざす旅」（金沢21世紀美術館、石川、2019）など。